

白の諸相

——エミリー・ディキンソンの絵画のモチーフをめぐる——

松本 明 美*

Aspects of White : Emily Dickinson's Pictorial Motif

Akemi Matsumoto

要約：アメリカの詩人、エミリー・ディキンソンの難解で省略の多い詩については長い間、様々な研究が行われてきた。そこで本論では、ディキンソンの「白」という言葉に着目することによって、彼女の絵画的なモチーフに隠された意味を見出して、言葉と詩をめぐる詩論の一端を導き出そうというものである。

ディキンソンが「白」を含む色を表す言葉を多く用いたのは、彼女が絵画に深い造詣があったことに起因している。彼女の「白」という言葉は清楚な花嫁（衣装）や雪の白さなどの伝統的なイメージを喚起する一方で、芸術や詩に言及する詩でも使われることがある。後者の目的で使われている「白」には、ディキンソンの出版に対する反感や、独立した詩人になるための決意が滲み出ている。そしてディキンソンが好印象を抱いていた「蜘蛛」の白い巣は、その白さからテキストとしての詩に譬えることができる。しかし「蜘蛛」が静かに巣を織り上げるように、詩人は誰かの注目を浴びることなく、粉骨砕身の努力を積み重ねて白い紙に言葉を書き連ねる。詩人がこの世を去った後も、秀逸な詩はあらゆる世代の読者に感銘を与え続ける。

ディキンソンの色彩や絵画に対する感受性は、絵画を鑑賞し、それに関する知識を蓄えることによって培われた。そのようなディキンソンの感受性が遺憾なく発揮されている絵画のモチーフは、詩論や芸術論などの抽象的なテーマを具体的に表現することで、読者の想像力をさらに刺激することができるのである。

Abstract : Emily Dickinson is one of the most important poets in American literary history, and various studies have long been conducted on her enigmatic and elliptical poems. This paper examines the hidden meanings of her pictorial motifs by focusing on the word “white.”

Dickinson used the word “white” and other colors because she was fascinated with paintings, as shown in some of her poems. Although her “white” has common references, such as bridal purity, snowy color, and nobility, this color sometimes reflects her theory of poetry or view of art. Through poems with a pictorial motif or images of “white,” we can read her distrust of publication and her firm resolution to set up as an independent poet. Moreover, the white web of a “spider,” which is Dickinson’s favorite creature, can be compared to her poems as texts, because the spider’s fine fabric and the poet’s poems are created laboriously without attracting anyone’s attention. However, both works attain immortal

* 関西福祉科学大学健康福祉学部 講師

life, as great arts make a deep impression on people of all generations.

Dickinson's sensitivity to colors or paintings results from admiring great painters' works and acquiring insight into the pictures' composition and impact. Therefore, her pictorial motifs are effective in expressing abstract themes vividly and concretely, stimulating an ardent reader's imagination.

Key words : 白 white 絵画 pictures 詩人 the poet

I

エミリー・ディキンソン (Emily Dickinson、1830–86) に関する研究は、彼女の死後 100 年にあたる 1980 年代をピークに、アメリカ文学界で稀に見る注目を集めることになった。この時期に上梓された研究書や学術論文のおかげで、この詩人の全貌や特質が次第に明らかになってきた。その一方で、ディキンソンの伝記的な部分においてはまだ謎が多く、難解と目される詩の多くについては今でも論壇を賑わせている。ディキンソンと言えば、成人して人間的にも成熟してくる頃になってから、自室にこもりだして、外部との接触をほとんど断った人という人物像が一般的である。だからと言って、ディキンソンが井の中の蛙の間知らずで、しかも淡白な思想の持ち主であったかと言えば、そうではなかったことが、彼女の詩や書簡から明言できる。

ディキンソンが詩を書く上で独特の思想を深めた要因として考えられるのは、ディキンソン家が所蔵していた蔵書と、当時一流の批評家だったトマス・ウェントワース・ヒギンソン (Thomas Wentworth Higginson) との文通、そしてラルフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson) たちによる超絶思想の影響である。さらにディキンソンの卓抜した感受性は、彼女が芸術に深い造詣があったことと関係している。ディキンソンがピアノ演奏だけでなく、絵画にも精通していたことも知られている。セント・アーモンドによると、ディキンソンはジョン・ラスキン (John Ruskin) の *Mod-*

ern Painters に影響を受けたという。¹⁾ 実際、ラスキンについて、ディキンソンは書簡の中で「あなたは私の本についてお尋ねですね・・・散文についてはラスキン氏とサー・トマス・ブラウン、それに黙示録です²⁾」と言及している。

ディキンソンの自然について書かれた多くの詩には、画家をイメージする表現や色を表す言葉がふんだんに使われている。それは特に風景を模写したような詩の中で用いられるが、詩論や他の抽象的なテーマの詩でも使用されている。ディキンソンの言葉による風景描写については、当時アメリカで活躍したトマス・コール (Thomas Cole) が風景画を多く描いていた³⁾ ことも関与していると考えられる。

ディキンソンが得意とする夕暮れの詩には、blue、gray、purple などの色が頻繁に現れる。例えば 233 番の詩である。

A slash of Blue —
 A sweep of Gray —
 Some scarlet patches on the way —
 Compose an evening sky —
 A little purple — slipped between —
 Some Ruby Trowsers hurried on —
 A Wave of Gold —
 A Bank of Day —
 This just makes out the *Morning Sky* —
 (Fr-233)⁴⁾

ここでは「一筆」(“slash”)、「一塗り」(“sweep”) など筆遣いを意識した言葉が出ている。詩的技巧としては、s の音が畳み掛けるよ

うに繰り出して、小気味よいリズムを生み出している。そのようなさりげない詩的技巧によって、白いキャンバスに次々に色がのせられて、夕暮れの風景が描かれていくまでの様子を読者は想像することができる。

ディキンソンの色を表す言葉は、夕暮れの詩の中でのみ効果を発揮するとは限らない。そのような夕暮れの詩の色とは対照的な雰囲気演出する色が、白だと仮定できる。この白という色は、彼女の詩の中で何度も登場する。その色は、一つのテーマだけでなく広範囲のテーマに関わっているため、複数の意味を内包していると考えられる。

白を意識した作家や詩人はディキンソンだけではない。あの大作『白鯨』(*Moby-Dick*)を著したハーマン・メルヴィル(Herman Melville)が、鯨の白さについて詳述している“The Whiteness of the Whale”という章の中で、白という色が持つ多様な意味について説明しているので、その一部を引用してみよう。

Though in many natural objects, whiteness refiningly enhances beauty, as if imparting some special virtue of its own, as in marbles, japonicas, and pearls . . . this same hue is made the emblem of many touching, noble things — the innocence of brides, the benignity of age . . . (204–205)⁵⁾

This elusive quality it is, which causes the thought of whiteness, when divorced from more kindly associations, and coupled with any object terrible in itself, to heighten that terror to the furthest bounds. (205)

Or is it, that as in essence whiteness is not so much a color as the visible absence of color, and at the same time the concrete of all colors . . . (212)

最初の引用では、白の一般的なイメージ、つまり白い色から滲み出る高潔さについて書かれている。「大理石」、「真珠」など、白を代表するような事物を並べ、さらには「花嫁の純潔」に象徴されるように、純真で清楚なイメージが強調されている。これは大方の人が肯定できる考え方だろう。

2つ目のパッセージでは、「白」は「捉えどころのない」性質を内在しているがゆえに、「恐ろしい事物」と結合し、「その恐ろしさ」をさらに高めていくことがある、と書かれている。これは初めの引用とは対立する内容であることが分かる。

最後の引用は、「白」は色彩というよりむしろ「目に見える色のない色」、つまり無色となりうる色であることを示している。まさにこの色は別次元の色にも変化することが分かる。このようにメルヴィルは、「白」が持つ様々なイメージに着目することによって、巨大な鯨を中心とした壮大な長編小説を描き上げることができたのである。

白と言えば、聖書ではヨハネの黙示録にある“white robes”が挙げられる。作家や詩人では、メルヴィルの他にも、ロバート・フロスト(Robert Frost)やウォーレス・ステイヴンズ(Wallace Stevens)が、雪の白さを重要な隠喩にして独自の詩を書いている。また、フロストは“Design”と題する詩の中で「えくぼのある、白いぼつちりした蜘蛛」を登場させ、さらには“white”という言葉を何度も出して、そのために全体的に不気味な雰囲気を醸し出している。メルヴィルに話を戻すと、先ほどの引用以外のところでは、白人人種にも言及している。白人と言えば黒人と対立する人種として、アメリカの作家たちがこの対立構造をしばしば作品の重要なテーマに選んでいる。アメリカ詩でも、例えばラングストン・ヒューズ(Langston Hughes)の場合、自分自身が黒人であることを理由に、黒人の悲哀やもどかしさを吐露した詩をいくつも書いている。

このように大まかに考えただけでも、白は様々なイメージを持つために、作家や詩人たちはそれぞれの意図や目的に照らし合わせながら、この色を重視して使っていると考えられる。逆に言えば、白ほど作品ごとのコンテキストに応じて使い分けられる色はないだろう。それだけに白は、他の事物を引き立てて、黒や dark なものとのコントラストを演出する役目を果たすだけでなく、この色自体が中心的モチーフに選ばれることもある。ディキンソンも詩の中でこの色を何度も使っており、実際、そのような詩はとりわけ異彩を放っている。本論ではディキンソンがなぜこの色を重要視したのか、そして次に詩の文脈に応じてどのような意味を込めたのかを考える。さらに第三章では、彼女が好んで用いた絵画に関係するモチーフについて考察しながら、ディキンソンの詩論の一端を掘り下げてみたい。

II

最初にディキンソンの“white”が出てくる詩を選び、それらの詩からその色がどのような目的で使用されているのかを考えてみたい。まずは 307 番の詩である。

A solemn thing — it was — I said —
 A Woman — white — to be —
 And wear — if God should count me fit —
 Her blameless mystery —

 A timid thing — to drop a life
 Into the mystic well —
 Too plummetless — that it come back —
 Eternity — until — (Fr-307, stanzas 1-2)

「女が白い色になる」とは、女性が純白の花嫁衣裳を着ることを指す。ここでの“white”は、女性が花嫁になり妻の身分に変わることを象徴している。“solemn”や“blameless”が呼応しあって、少女から成人女性へと変わる厳粛

な儀式を伝えている。この詩の“white”は、メルヴィルの引用で見られたような純真無垢な花嫁のイメージと合致する。あるいはこれは聖書の復活のイメージをも喚起する。また、この言葉の前後にダッシュを使って孤立させることで、より一層注目させる意図があるとみなすことができる。

次に 411 番を読んでみよう。

Mine — by the Right of the White Election!
 Mine — by the Royal Seal!
 Mine — by the sign in the Scarlet prison —
 Bars — cannot conceal! (Fr-411, stanza 1)

行末のエクスクラメーションマークの繰り返し、語り手のペルソナの高揚した気分を端的に表している。1 行目の“White Election”の「白」もまた、307 番同様に結婚を匂わせるイメージである。“Election”はディキンソンらしい diction の一つで、その意味は自らの意思で選び取ること、あるいは神の選びも考えられる。地上で叶わなかった恋愛を天上で成就させる意思を暗示する。しかしながら、“Scarlet prison”という情熱的というより血の気を帯びた「牢獄」が出てくることで、さらにこの「白の選び」は引き立ってくる。

307 番と 411 番の引用から分かることは、花嫁になるという神聖な瞬間が、“white”の色で象徴的に置き換えられているということだ。そして白い服を身にまとうモチーフは、ディキンソンが実際に白い衣装を着て自室にこもりだしたこととつながるだろう。それが読者にとって、かえってこれらの詩をより一層、謎めいたものになっている。

さらに「白」について、別の角度から考えてみたい。次の 401 番は、411 番に負けず劣らず激しい情熱を放散している。

Dare you see a Soul at the White Heat?
 Then crouch within the door —

Red — is the Fire's common tint —
 But when the vivid Ore
 Has vanquished Flame's conditions,
 It quivers from the Forge
 Without a color, but the light
 Of unannointed Blaze.
 Least Village has it's Blacksmith
 Whose Anvil's even ring
 Stands symbol for the finer Forge
 That soundless tugs — within —
 Refining these impatient Ores
 With Hammer, and with Blaze
 Until the Designated Light
 Repudiate the Forge — (Fr-401)

詩の語り手のペルソナは挑戦的な口調で語り始める。読者にとってこの詩は、一読しただけでは一つの解釈にたどり着けない難解な要素を持っている。「白熱する」とは文字通り、熱意などが最高潮に達することを意味する。その状況は、「ドアの中」とあるように、物事の内部、さらには隠喩的に心の内側で「白熱する」ことを示している。この「白熱する」魂が紆余曲折を経て、やがては「選ばれた光」を出すほどのエネルギーを秘めている。「白熱する」魂を持つ人物とは、白い服を着たディキンソン自身だと主張する批評家がいる。⁶⁾もしこの主張に賛同するとすれば、この詩は「白熱する」ほどの詩作のエネルギーを保持したディキンソンが、「鍛冶屋」(“Blacksmith”)のように自室でこつこつと詩を書き、やがてその中から純然たる光を放つ詩が完成するまでを示している。そして詩の中の「白」は、その色が無化されて見えない状態にまで達する。このような一連の化学変化をディキンソン自身に当てはめるとすれば、心の内に秘めた激しい情熱に、孤独や葛藤などの微妙な心の変化が融合することで創作に厚みが増して、その結果ヴァリエーションに富んだ詩を生み出すことが可能になったと考えられる。

次の788番の「白」は一層複雑な意味合いを帯びている。

Publication — is the Auction
 Of the Mind of Man —
 Poverty — be justifying
 For so foul a thing

 Possibly — but We — would rather
 From Our Garret go
 White — unto the White Creator —
 Than invest — Our Snow —

In the Parcel — Be the Merchant
 Of the Heavenly Grace —
 But reduce no Human Spirit
 To Disgrace of Price —
 (Fr-788, stanzas 1-2, 4)

この詩には出版する行為に反発していたディキンソン自身の考え方が、アフォリズムとして示されている。実際にディキンソンは、ヒギンソンにあてた手紙の中でも、詩集の出版は自分にとっては無関係だと言いつけている。⁷⁾その理由はこの詩の中でも断言されているように、「人の心の競売」(“the Auction / Of the Mind of Man”)、すなわち「人の心」に売値をつけてお金を儲けることは「あまりにも不愉快なこと」だからである。“Mind”と“Man”のm音のアリタレーションが、主張をさらに強めるのに効果を発揮している。本を出版するということは、物理的に物を売買することを意味しているのではない。詩は一つの思想が心の中で徐々に熟成されて、それが言葉になって視覚化される貴重なものである。だからこそ、人間の精神活動が基盤となる詩を売ることは、人間の精神を売ることに等しい。そのことが第4スタンザの最後にある「価格の不名誉」というフレーズに

表れている。

第2スタンザには“White”が2度出てくる。このスタンザをパラフレイズすると、質素な「屋根裏部屋」から「白いまま白い創造主の元へ」となる。初めの“White”は心の潔白さを示し、次の“White”は創造主である神を指す。次行の“Our Snow”も、白を代表するイメージである一方、それは日光に当たると融けてしまうはかないイメージも併せ持つ。佐藤智子氏によれば、この「雪」はディキンソン自身の詩で、ディキンソンは自分の詩を純粋さや高尚さと同義語の雪にたとえているという。⁸⁾さらにウェンディ・バーカーが、この「雪」について敷衍して説明している。つまり、「雪」であるディキンソンの詩は、太陽の当たる外部の世界に晒されると、様々な批評をされて、場合によっては存在価値のないものとして評価され、はかなく消え去ることがある。⁹⁾この美しくもはかない雪のような性質を付随した詩は、いくら丹精を込めて書き上げたものでも、束の間の生命しか持たないかもしれない。「雪」そのものの詩は白く、純粋な性質を持ち、高潔さも併せ持っている。これはまさに「白い創造主」と同類であるため、ディキンソンにとって「出版」という行為は許しがたいことが分かる。だからこそ「人間の魂」が凝縮された詩を売ることを「不名誉」だと断言し、卑下するのである。

詩は神が造られたものとする考え方には、ディキンソンの出版に対する考え方が顕著に表れている。この詩の根底には、当時の女性詩人の立場や状況を垣間見ることができる。男性詩人の詩や思想が席卷していた時代に、女性詩人が詩の伝統や規範を逸脱して、堂々と自分の詩を世に問うことは不可能だった。そのような現実に対する一種の反骨心が、この詩を完成させる動機付けになったと考えられる。また、「雪」のように混じり気のない白さこそが、ディキンソンにとって無限の可能性と創造力を感じさせる色なのである。

III

788 番の詩で考察したように、ディキンソンにとっての「白」は多彩なイメージを含む。そしてディキンソンはこの色を使って詩作と詩についても言及している。このことはディキンソンが白い服にこだわって着用していたという伝記的事実をも想起させる。したがってこの章では、「白」がディキンソンの詩作や詩論を反映する色でもあると仮定して、さらに詳細に考察してみたい。

まず、513 番の詩を読む。

The Spider holds a Silver Ball
In unperceived Hands —
And dancing softly to Himself
His Yarn of Pearl — unwinds —

He plies from nought to nought —
In unsubstantial Trade —
Supplants our Tapestries with His —
In half the period —

An Hour to rear supreme
His Continents of Light —
Then dangle from the Housewife's Broom —
His Boundaries — forgot — (Fr-513)

ここでの「蜘蛛」は「銀色の玉」を持って静かに「ダンス」をしている。そして「ダンス」をしながら自分の「真珠の糸」を「ほどく」作業を繰り返している。ペルソナから見ると「蜘蛛」の行為は「利益にならない商売」(“unsubstantial Trade”)に等しい。しかし「蜘蛛」はおかまいなしに自分の「商売」に邁進し、「無」(“nought”)の状態から「半時の間」に「壁掛け」を作り上げてしまう。やがて「1時間」もすると、最後のスタンザにあるように「最高の／光の大陸」を完成させる。しかし当の「蜘蛛」は「主婦の箒」から「ぶら下がる」のであ

る。

「蜘蛛」は全体的にユーモアや諧謔の効いた言葉遣いで描写されている。「蜘蛛」という生き物よりもその動作、さらにはそれが作り上げる巣の方に焦点が当てられている。「真珠の糸」は「蜘蛛」が保持している白い糸を指す。「真珠」はディキンソンが好んで使用する隠喩であり、彼女の詩の中では白をイメージする代表的な言葉でもある。そして「蜘蛛」は時間をかけて「無」の状態から壁掛けのような巣を完成させる。それはまた視覚的にも、独創的な網目模様を展開している。最後にはその巣は、「最高の／光の大陸」と賛美される。

蜘蛛には一般的に、薄暗い空間の片隅に生息する小汚い生き物、というネガティブなイメージが先行してしまう。ところがディキンソンの「蜘蛛」は存在感こそ希薄なもの、その地味な行動にいたっては、一目置かれる存在になる。「蜘蛛」の体内から紡ぎ出される糸は、1本の繊細な白い線だが、それが「大陸」と呼べるほどの巣を作ってしまう。ディキンソンにとってそれは、マイナスのイメージが強いものではなく、むしろいぶし銀のような芸術作品に匹敵する。批評家のギルバートたちによれば、「蜘蛛」が「ダンス」をしながら糸を吐いて編み出す行為は、「芸術を表す隠喩」¹⁰⁾の一つだという。また「蜘蛛」が「壁掛け」を編む行為は、文学理論の考え方を借用するとすれば、詩のテキスト（テクスチャー）を織る行為と同類だとも考えられる。「蜘蛛」が「無」の状態から白い糸のみを駆使して白い織物を作るという表現は、ディキンソンにとって、詩人がこつこつと白い紙に言葉を書き連ねて詩（テキスト）を完成させるまでを示す隠喩である。詩人にとって自分が丹精を込めて書いた詩は、「最高」と形容できるほどの珠玉の作品だろう。ただそれに比べて詩人という存在は、光輝くような詩とは正反対に、さほど顧みられない存在である。まさに「蜘蛛」と同様の結末をたどるものと思われるが、この詩は悲観的というより滑稽

な調子で締めくくっている。

次の1163番にも「蜘蛛」が登場する。

A Spider sewed at Night
Without a Light
Opon [Upon] an Arc of White —

If Ruff it was of Dame
Or Shroud of Gnome
Himself himself inform —

Of Immortality
His strategy
Was Physiognomy — (Fr-1163)

この詩は女性的な縫い物の隠喩を使いながら、普段は見向きもされない「蜘蛛」にスポットを当てて、その生き物が縫い上げた巣が「不滅」に値することが淡々と語られている。第1スタンザの“an Arc of White”は、「蜘蛛」の巣を隠喩的に言い換えた表現である。「蜘蛛」はこの「弧」を幾重にも重ねて、やがて見事な網目のデザインの巣を完成させる。第2スタンザの“Himself himself inform”とあるように、「蜘蛛」が自分の体内から白い糸を吐き出して自分だけで作ったものは、元々はその体内に秘蔵されていたことになる。だからどういうものが完成するのかも、「蜘蛛」だけが知っているのである。

第3スタンザでは、抽象的な言葉が続き、しかも各行には単語が2つずつというさらに引き締まった文体になっている。ディキンソンが別の詩で、“The Spider as an Artist” (Fr-1373) と述べるように、「蜘蛛」は「芸術家」を暗示する隠喩になることがある。さらに「蜘蛛」が巣を織る行為は、513番でも言及したように、織物（テクスチャー）を織る行為に喩えられる。元々 text という英語は〈織られたもの〉という意味を持つため、詩は言葉が織り込まれたもの、という考え方も成り立つ。したがって詩人

は、自分の想像力を頼りに比喩や韻律を織り込みながら詩を完成させる、という詩作のプロセスを読み取ることができる。ディキンソン自身は蜘蛛の巣を観察しながら、詩という芸術に思いを致していたに違いない。優れた芸術は、世代を超越して「不滅」の生命を得る。「人相学」が顔や表情から判断するのに対し、詩は言葉から意味やメッセージを読み取る。この詩では巣の白い色と、「蜘蛛」や「夜」の黒い色が拮抗するモノクロ的な世界の中で、ディキンソンの芸術論が見事に示されている。

次に画家と詩人のモチーフを使った詩を読んでみよう。

I would not paint — a picture —
I'd rather be the One
It's bright impossibility
To dwell — delicious — on —
And wonder how the fingers feel
Whose rare — celestial — stir —
Evokes so sweet a torment —
Such sumptuous — Despair —
.....

Nor would I be a Poet —
It's finer — Own the Ear —
Enamored — impotent — content —
The License to revere,
A privilege so awful
What would the Dower be,
Had I the Art to stun myself
With Bolts — of Melody!

(Fr-348, stanzas 1, 3)

ここで省略した第2スタンザは音楽家について述べられているが、引用の第1スタンザでは画家について、第3スタンザでは詩人について述べられている。ペルソナの「私」はかたくなに画家や詩人になるのを拒否する。そのような芸

術家になるのではなく、むしろ「絵」になりたいと考えている。しかしその理由を複雑な表現で述べている。それは“bright impossibility”（「輝く不可能」）に始まって、“so sweet a torment”や“Such sumptuous — Despair —”の撞着語法的な表現¹¹⁾と、s音のアリタレーションを試みることで、ペルソナは心を揺さぶる1枚の絵を見たときの衝撃や興奮を伝えようとしている。第3スタンザになって漸くペルソナは詩人について述べる。2行目には「耳」という意表をつく言葉が出てくる。その言葉に呼応するかのようにペルソナは最後に、「旋律の稲妻」(“Bolts — of Melody”)という力強いフレーズで締めくくっている。それは多少大げさな表現だが、美しく心地よいメロディーというより、ショックを受けるほど心を揺さぶるものだろう。“Art”はここでは「芸術」を指すが、他に「すべ、技術」という意味も考えられる。詩人の本来の仕事とは、読者に何かを伝えて感動を与えられるような「芸術」を創造する「技術」を磨かなければならない。そのためにはまず、自分が読者として「気絶する」ような体験をすることが条件になる。詩人自身が「旋律の稲妻」を発生させるため、日々精進することが大切である。

詩人の定義を、絵と結びつけて説明した詩がある。

This was a Poet —
It is That
Distills amazing sense
From Ordinary Meanings —
And Attar so immense

From the familiar species
That perished by the Door —
We wonder it was not Ourselves
Arrested it — before —
Of Pictures, the Discloser —

The Poet — it is He —
Entitles Us — by Contrast —
To ceaseless Poverty —
(Fr-446, stanzas 1-3)

詩人も画家も、見慣れて日常化したものや枯れていくものにも目を向け、それらを言葉や絵を通して人々に提示することで、新たな発見や驚きを体験させることができる。特に詩人の役目とは、表現に工夫を凝らして物事の真実を言葉に託して伝えようとするのだらう。ディキンソンはおそらく詩人の存在意義とその仕事の崇高さを認識していたに違いない。

これまでディキンソンの詩に使われた「白」のイメージを中心に考察したように、彼女の場合は伝統的な白のイメージを前面に出すことで、詩全体に純粹で気高い雰囲気醸し出している。その一方でディキンソンの詩は、その色の伝統的なイメージや印象に固執せずに、独自の「白」の世界を構築している。その例として、513番と1163番の「蜘蛛」の詩では、「蜘蛛」の巣を詩のテキストと重ね合わせて詩人と詩の関係を表現しようとしている。そしてディキンソンは「蜘蛛」の行動をつぶさに観察しながら、それをまるで偉大な生き物であるかのように見なしている。この地味で小さな生き物にディキンソンが焦点を当てて、一人の人間であるかのように擬人化したのは、ディキンソン自身が「蜘蛛」の静かな営みに、詩人としての自分を垣間見たからかもしれない。そして読者の側はこのような詩から、30代を過ぎたディキンソンが白い服を着用して、部屋で詩を書きためていたことを思い描くことができる。

ディキンソンが色彩に対して敏感だったのは、絵画を鑑賞して感受性を涵養したり、絵に関する知識を深めたりしたことが原因である。そのため詩を書くときには、画家が描く対象を細部に至るまで観察するように、物事を深奥まで凝視する姿勢を貫いているのが分かる。言い換えれば彼女の繊細な感受性が遺憾なく発揮

された絵画のモチーフは、抽象的なテーマをできるだけ具体的に表現しようとした努力の結果だと言える。絵が鑑賞者の視覚に訴えるように、色彩を表す言葉は、読者の脳裏で想像力を強く掻き立てるための重要な役割を果たしている。

最後に、ディキンソンらしい無駄な表現を省いた、小さな詩を紹介する。

White as an Indian Pipe
Red as a Cardinal Flower
Fabulous as a Moon at Noon
February¹² Hour — (Fr-1193)

「銀竜草モドキ」の白い花と「紅花沢枯梗」の赤い花と、うっすらと白みを帯びた「昼の月」。1枚の絵になりそうな情景は、静寂なる「2月の時」を映し出している。アマーストの「2月」と言えば、まだ雪が降る厳寒の時期かもしれない。しかしこの短い詩は静かな余韻を湛えて、春の芽生えへの淡い期待をも感じさせる。

ディキンソンの「白」は、これまでに考察したように豊かで多彩なイメージを持つ。ディキンソンはそのイメージを巧みに使い分けながら、真実を言葉で描こうとしている。ディキンソンは詩を書くとき、画家のように物事を綿密に観察する姿勢を手本とし、時には絵画のモチーフを実際の詩作で試みた。ディキンソンの絵画的モチーフは、色々な色彩の中でも特に「白」が中心になったとき、詩と絵画の長所が上手く融合して、詩的世界をさらに拡大するのに効果を発揮する。その意味でも「白」が見られる詩は、ディキンソンの詩に対する考え方を知る上で重要であり、剋目に値する。彼女の言う「絵の意味を解く人」とは、物事の真実を見定め、自分の中でいったん咀嚼し直して再現できる芸術家、究極的には詩人を暗示している。まさにディキンソンこそ、その行為を實踐できた稀有な詩人なのである。

[付記]

小論は、日本アメリカ文学会関西支部7月例会（2004年7月10日、於：関西学院大学）において口頭発表した原稿を元に、加筆修正を施したものである。

注

- 1) Barton Levi St. Armand, *Emily Dickinson and Her Culture: The Soul's Society* (Cambridge: Cambridge UP, 1984). セント・アーマンドは著書の中で、度々ジョン・ラスキンに言及しながらディキンソンの詩を考察している。ラスキンは5巻からなる *Modern Painters* を書いたが、その中で彼は風景画を初めとする壮大な絵画論を展開している。また、ワーズワスなどの詩人たちを取り上げて、詩人が自然とどのように対峙して、どういった詩を創作したのかを詳細に説明している。*Modern Painters* の第3巻については、以下の訳本も参考にした。『風景の思想とモラル——近代画家論・風景編』ジョン・ラスキン著、内藤史朗訳、法蔵館、2002年。
- 2) Thomas H. Johnson and Theodora Ward, eds., *The Letters of Emily Dickinson*, 3 vols., by Emily Dickinson (Cambridge: The Belknap P of Harvard UP, 1958). 404-405. No. 261.
- 3) アメリカの画家（1801~48）。アメリカの雄大な風景を写実的な手法で描く。（『コンサイス

外国人名事典』第3版、三省堂、361頁を参考。）

- 4) 小論では、ディキンソンの詩の引用は1998年に出版されたフランクリンの3巻本により、Fr-233と記す。
R. W. Franklin, ed., *The Poems of Emily Dickinson*, 3 vols., by Emily Dickinson (Cambridge: The Belknap P of Harvard UP, 1998) 256-257.
- 5) Herman Melville, *Moby-Dick, or the Whale* (Harmondsworth: Penguin Books, 1992). Chapter 42 "The Whiteness of the Whale." 引用した頁数を丸括弧に入れて示す。
- 6) Sandra M. Gilbert and Suzan Gubar, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (New Haven: Yale UP, 1979) 613.
- 7) *Letters*, No. 265.
- 8) Tomoko Sato, *Emily Dickinson's Poems: Bulletins from Immortality* (Tokyo: Shinzansya Publishing Co., Ltd., 1999) 148.
- 9) Wendy Barker, *Lunacy of Light: Emily Dickinson and the Experience of Metaphor* (Carbondale: Southern Illinois UP, 1987) 84.
- 10) Gilbert and Gubar 633.
- 11) Judy Jo Small, *Positive as Sound: Emily Dickinson's Rhyme* (Athens: U of Georgia P, 1990) 57.
- 12) "February" を "Febuary" と綴っている。